

第1回松本市中央図書館あり方検討委員会 議事録

日時：令和2年8月27日（木）13：00～17：00

場所：松本市中央図書館 第1視聴覚室

【出席者】

伊東委員長、菊地副委員長、森委員、森田委員、吉成委員
（事務局）横内教育部長、瀧澤中央図書館長、羽田野館長補佐、町田館長補佐、
栗田館長補佐、百瀬主査、内山主査、丸山（和）主事

【議事録】

1 開会

2 教育部長あいさつ

教育部長の横内俊哉と申します、どうぞよろしく願いいたします。

まず当委員会の委員をみなさまにお願いをしましたところ、それぞれ快くお引き受けいただきまして、誠にありがとうございました。本日は大変な猛暑の残る中、また公私とも大変にお忙しい中、お集まりいただきまして、重ねて感謝を申し上げる次第でございます。

みなさまの委員としての任期でございますが、本日から所掌事項の検討が終わるまでということでもありますので、どうぞよろしく願いいたします。

さて松本市では、この中央図書館と10の分館、それから信州大学附属病院のこまくさ図書室とネットワーク連携を図りながら図書館サービスの提供を図っています。

平成の大合併を繰り返しながら地域が広がったわけですが、そこがひとつの松本市の強みであり財産であると考えています。その一方で中央図書館は平成3年の開館ということで28年が経過し、老朽化とハード面でのさまざまな課題が停滞化しているということでもあります。

臥雲市長からも近隣の市の後塵を拝しているのではないかと厳しい意見を頂戴している所でございます。そこで当委員会では分館を含む松本市図書館の今後のあり方だったり、図書事業に関しまして、委員のみなさま方の豊富な経験と実績に基づき、少子高齢化時代を迎え、また高度情報化社会であったりデジタル社会であったり、さらにはコロナ禍において私たちの生活そのものが見直しをされる中で、20年先30年先の図書館像のあり方につきまして、ぜひ委員のみなさまから多角的に総合的に検討を行っていただきたいなと存じます。臥雲市長からも、「ダイナミックな意見・議論をいただきたい」と、期待をされております。

そして、そういった中で改めて明確化される本市図書館の将来に向けたミッションであり、ビジョンや取り込むべきサービスの方向性を事務局が報告書としてまとめ、それをもとに新年度には松本市図書館サービス基本計画を策定する予定となっております。

本日の会議でございますが、この後委員長、副委員長の選出をいただき、その後の議事では本市の現状や課題を踏まえながら今後の進め方等について、みなさま方の忌憚のないご意見を賜りたいと存じております。本市の図書館の今後のあり方につきまして、是非委員のみなさまのお力添えを賜りますよう改めてお願いを申し上げ、簡単ではございますが私からのあいさつとさせていただきます。

- 3 自己紹介
- 4 松本市中央図書館あり方検討委員会の概要説明
- 5 委員長及び副委員長選出
- 6 委員長あいさつ

7 議題

(1) 松本市中央図書館の現状と課題

- ・令和2年度図書館概要
- ・市民アンケート調査結果
- ・同規模自治体調査報告
- ・職員ワークショップまとめ

事務局：説明

(2) 館内見学・休憩

(3) 質疑応答、(4) 次回に向けての意見交換

伊東委員長：

これから45分ほど、16時まで質疑応答の時間としたい。その後、みなさんから意見をいただいていく。

私が確認したいのは『松本市中央図書館』の範囲。中央図書館のあり方の検討というのは松本市の図書館全体のことということだが、私は当初、この中央図書館という建物のあり方という認識だったため、このことを確認しておかないと私たちの議論の範囲がブレてしまうので、まずお聞きしたい。

瀧澤館長：

図書館概要のP2に松本市教育委員会組織図がある。「中央図書館」は組織の名称であり、10館の分館を含む松本市の図書館組織を「中央図書館」と表記している。

伊東委員長：

今の説明のとおり、私たちの議論の範囲は、全市に対する図書館サービスがどうあるべきか、そのあり方はどうなのかというものになる。大きな範囲の話になるので、今日、なにかのテーマに話を持っていくというシナリオはないので、これまでの話のなかで聞きたいことがあれば、出していただきたい。感想でもいい。

森田委員：

意見感想というよりも、まず、私の立ち位置を確認していただこうと思う。

中央図書館というのは、松本市全体の広い範囲だとうかがった。その中央図書館は『ザ・図書館』というような、従来の施設の最新型を目指すということなのか。私がやっているのは、活動の拠点という感じのもの。

先ほど、「ゲームはダメ」という話があったが、私は「ゲームもあり」だと言っている。ゲームを許さないと青少年たちが来ない。図書館内にゲームをやってはいけない場所は無数あるが、やっていい場所を作ることによって子どもたちが来るようになる。そんな風にかかれた『図書館』

という新たな方向があって、私たちはそういうことをやっている。

『ザ・図書館』か、開かれた地域自治の拠点にしていくのか、そのための議論をしていいのか、その辺を知りたい。

伊東委員長：

議論を進めていくには自身が考える背景・軸が大事。「自分が発言する時には、こんな背景がある」というようなところを語っていただくことは大事。みなさんそれぞれの立ち位置をお話しいただきたい。

吉成委員

僕がやっているメディアコスモスというのは、図書館を含む全体がまちとしてどうやっていくのか、発展させようとしているところ。考え方としては森田委員が言われる図書館に近い。

もうひとつの視点として私が言わなければならないのは「子ども」ということ。社会教育施設の中でそこをどうしていくかが先ほどから気になっている。

図書館概要のP4の下段、「学都松本」としてめざすまちの姿というところに非常にいいことが凝縮して書かれているが、続くP6の「図書館重点目標」と全く整合していない感じがする。この乖離がなんなのか議論した方がいいと思う。

やはり、子どもたちの自主性自発性を大事にしながら、伸びしろをお互いに喜び合いながら増やしていくことがまちづくりにつながるという視点に立ったとき、図書館の活動の内容は変わっていくと思う。今は「読書」という範囲のなかで活動が組まれているという印象がある。

菊地委員：

『ザ・図書館』の議論をするために呼ばれたわけではないと思っている。個人的には新しい図書館のあり方に興味がある。全国ではメディアコスモスをはじめ、さまざまな事例が出てきているなか、松本市が「学都」を標榜するのであれば、松本市の図書館も新しいトライを見せてほしいと思っていたところでもあり、松本市の新しい図書館の姿とはどういうものなのか、この場で議論してみたい。

森委員：

4月に県立図書館副館長に就任してすぐ、コロナ対応だった。この間、本の貸出に関してできたのは、有料の郵送サービスであり、通常の5%の貸出数に過ぎなかった。我々が持っているサービスの手段がいかに限られたものであるかを自覚し、改善していきたいと思った。その方策としてデジタルシフトを考えている。

お配りした資料は、今回のコロナ対応を契機に、コロナ以前からあったバリア（図書館に来られない、重い本を持って読むのが辛い等々）に対応していくためにもデジタルシフトにしていく必要があると考えて作成したもの。全くの叩き台ではあるが、平賀前館長が書いたものに基づいて、長野県のライブラリー構想を図にしてみた。手続きの電子化、目録の電子化、場の電子化、コンテンツの電子化の4象限がある。コンテンツの電子化は出版界がどう動いていくのかということもあり、図書館だけががんばってもできない部分はあるが、デジタルシフトをどういう風に進めていけばよいかということをお場で一緒に考えていければと思っている。

【資料の説明】

目録の電子化：図書館の所蔵資料には、いまだに目録に収録されておらず、存在自体が知られていないものがまだまだあるため、「目録の電子化」をデジタルシフトの要件に入れている。

手続きの電子化：サービスを受ける市民の側のデジタル化が一様ではないなかで、サービスの提供側のデジタル化を推し進めるのは不公平を生むという議論があるが、コロナ禍のなか、学校教育の現場でも市民生活でもデジタル化をインフラとして整理していこうという流れに乗って整備していきたい。

場の電子化：よく「リアルかバーチャルか」「来館型サービスか非来館型サービスか」と、二項対立的に語られるが、両方だと思う。選択の幅を広げ、両方を有効に機能させながらサービスしていくという意味では場の電子化は必須だと思う。

コンテンツの電子化：私は、コミュニティの中心になるという役割を図書館に期待しているが、他の社会教育施設、民間のいろいろな施設と手を組んで、図書館でなくてもできることはほかの施設に任せればいい。図書館でこそできることに注力すべき。

図書館でなければできない、資料、情報をちゃんと確保したうえで構造化し、発見しやすくし、発信することをどうやって進めていくかということだと思う。

伊東委員長：

私の立ち位置は、地域にどのような役に立つかという切り口で図書館を考えるということ。図書館なので、資料と職員がしっかりしていることというのが基本。そのうえで地域にどんな役立ち方をさせていくかを考えている。

委員のみなさんはそれぞれに立ち位置があり、それが当然なので、その立ち位置で思い切り話をすることにした。ただし、言いたい放題に終始するのではなく、しっかりした「裏」を持てる議論にしていきたい。

伊東委員長：

今回のアンケート結果が、一応、あり方を考えるうえで基本になるかと思うが、今後の取り扱いについて何かあれば意見を出していただきたい。

森委員：

分析結果の8枚目に満足度の集計結果が出ている。このアンケートは来館者のみではなく、普段図書館を利用していない人も対象としている点が素晴らしい。普段、図書館を利用している人と利用していない人では満足度に差があることが示されている。図書館を利用している人の満足度を上げるだけでなく、全く図書館に興味がなかった人たちを新たに獲得していくことが大事なのであれば、今、満足度が低い人に手を伸ばしていかなければならないということがある。

「満足度」の結果に対して自由記述を含む回答の傾向、特徴についての分析があれば、補足説明をお願いしたい。

事務局（町田）：

現状では数字的に集計してあるだけで、分析には至っていない。

瀧澤館長：

満足度は年代的にも差があるのではないかと感じている。年代による整理もできるということなので、次回までにそういった分析をしておきたい。

森委員：

わかりました。

伊東委員長：

このアンケートは利用者のみでなく、市の職員だとか、図書館以外の所で用紙を配っているの
で、どちらの声も聞こえてきている。

それでも利用者の回答が7割になっているので、利用者の傾向は読み取れる。利用者がある程度
満足している一方で、図書館に来たくなくて来ていない人もいるのが現実だろう。図書館に背を
向けている人にも図書館に来てほしいという切り口のときに、一体どういう図書館のあり方がある
かといところを考えていくことが必要。このアンケートの結果を見て「今、図書館に来ている
人たちが満足しているから良かったね」というわけにはいかない。

満足度については「どちらとも言えない」以下のみなさんも図書館に来てくれているが、不満
がないわけではないので、その辺りに最初にできることがあるのだろう。施設の改築に関わるよ
うな大きな内容もあるが、小さなことも多く書かれており、すぐにできそうなものもあるので、
アンケート結果をそんな風にも使えるという気はする。

森田委員：

今の図書館の利用者をベースにしたアンケート調査には、総じて従来の図書館のままでいて欲
しいというバイアスがかかっているの、私は信用しない。今の図書館から出発して設問を考え
る限り、新しいものはできない。

新しいものを作るためには「もし、こうなったらどう使いますか？」という投げかけをしていく。
吉成さんのように「屋根のある公園を作ります」といって「えっ?!」と、反応が返ってくると
いうようであれば変わらない。

吉成委員：

松本市の図書館のこれから先の、新しい方向というものを言語化できている人は誰もいないの
で、何某かの仮説を持つためにこうした計量的な調査が必要だということは分かる。先ほどから
の話のなかで来館しない人はどう見ているのかというのがあがるが、このアンケートには来館して
いる人への質問としない人への質問が2層に分かれながら入っていると感じた。

伊東委員長：

菊地さんは何かありますか

菊地委員：

こういうアンケートでは不満を持っている人の声を取り上げられているか、深く聞いてみたい。
少数意見を掘り下げてもいいのではないかと思う。

伊東委員長：

苦情は宝物。図書館側が気づけていないところを指摘してくれている。

みなさん、数字的なものには特に意見がなさそうだが、数字も調査のテーマなので、私から。
図書館概要のP20に7つの指標があるが、貸出指標だけなのかと思った。無論、大事な指標だが、
もっと幅広い指標を設定しないといろいろな声を拾えないのではないかと。

アンケートに「知っているサービス、利用しているサービス」という設問があった。「図書館ア
ンケートまとめ」のP7。調査相談サービスを知っているのが16%で使っているのが5%。まさに貸
出につながるサービスなので、職員はとてものがんばっている部分だと思う。職員の声のなかに「レ
ファレンススキルを上げたい」「勉強したい」というのが多くあるものの、住民はさほど重要視し

ていないらしいことがここで見えてしまっている。

図書館の役立ち方は、情報・知識を使って何かするという、図書館ならではのものであり、レファレンスは重要なサービス。この「知っている・利用したことがある」の設問の数字に松本市の図書館の傾向が少し見えている気がした。

瀧澤館長：

松本市の図書館概要の指標には、この7つの指標をずっと出している。一方で松本市教育振興基本計画にも多くの内容を幅広く載せており、まとまったものがないままやってきている。図書館のあり方検討委員会の設置は、図書館サービス基本計画を策定するいい機会だと思っている。

教育振興基本計画にはレファレンス数も目標値として載せている。ほかには調査相談、インターネット利用サービス、オンラインデータベースサービス、大学図書館との連携、公民館との連携、団体貸出サービス、障がい者サービス、講座・講演会の開催、貴重資料の保存・活用事業、郷土資料の充実を挙げている。

菊地委員：

それは市民も閲覧できるサイトで公開されているのか。

瀧澤館長：

はい。

菊地委員：

後日でいいので、URLを共有してもらえないか。

瀧澤館長：

承知しました。

吉成委員：

感想だけになるが、P7の「知っているサービス・利用しているサービス」のなかで、「リサイクル本の配布」の数値が高い。日頃図書館を利用している人なのか、そうでも人なのかは不明でも、「あ、ここに集まっているんだ」と、とても分かりやすい気がする。

伊東委員長：

これは、年に1回やっているリサイクル市のことですか？

事務局（町田）：

中央図書館では図書館まつりと一緒にやっているもの。分館でも公民館の文化祭に合わせてそれぞれやっている。

伊東委員長：

これは新聞に載せてもらっていて、それが大きい。印象にも残る。これを利用したことがあるという回答の数値も高い。相談調査サービスの5%に対して14%もある。

吉成委員：

そういうことなんですね。

伊東委員長：

先ほど教育振興基本計画の話題があったが、基本計画云々と言えば、菊地さんも第3次かなにかの委員だと聞いているが・・・

菊地委員：

第11次の松本市総合計画市民会議の委員になっている。

伊東委員：

松本市の基本計画ですか？ 基本構想を含むものなのか

瀧澤館長：

基本構想と基本計画とで総合計画になっている。今、市民会議を分科会方式で開催している。

伊東委員長：

今、直そうとしている元の方に図書館は載っていますか？

瀧澤館長：

元の方って総合計画でしょうか？・・・基本計画にはちょっとずつ載っています。

伊東委員長：

基本計画にはちょっと載っても、基本構想、ましてや総合計画には図書館はまず出てこない。是非、図書館に関する議論もしてほしい。

菊地委員：

そう思う。

基本構想の会議は3部会に分かれており、私は都市計画に所属している。他に経済振興と教育厚生部の部会があり、図書館の議論は教育厚生部会で行われると思う。それぞれの部会で議論が進められているが、次々回あたりで合流する機会があるので、その時に他の部会の話ができると思う。教育厚生部会の議論に図書館が含まれていないようであれば、私から提案することは可能。

伊東委員長：

計画というのはどうしてもタテ割りになりがち。違う部会の議論のなかで「それには図書館が使える」というものが出てくればいいと思っている。例えば福祉の部会で、図書館が使えるという発想が生まれてくれば嬉しい。そういう意味で、「計画」の議論のなかで積極的に図書館を拾ってほしい、仕掛けてほしいという気がしている。

伊東委員長：

ここで次回に向けての意見交換に入りたい。今後の進め方について事務局から提案は？

事務局（町田）：

今後の流れを資料（別紙：会議の開催日程について）にまとめている。あくまで、参考にしていただくための「案」としてお配りした。

伊東委員長：

事務局の案に質問等あれば出していただきたい。

森田委員：

そもそも図書館は何を目指すのか。というものはないのか。それがなければ、なんの議論にもならない。

菊地委員：

2回目以降は個別具体的な話題に移行しようとしているが、『中央図書館』が松本市中央図書館を起点とする分館を含めた図書館サービスの体系だということを踏まえれば、松本市の図書館が市民にとってどういうものであるべきか、「図書館とはなんなのか」という議論をしない限り、ITCもゾーニングも、具体的なサービスの話も、何に向かってすればいいのかが見えてこない。

森田委員：

「図書館は知の拠点」という言い方は大嫌い。『知』というのは現場にある。病院だったり、研究室だったり、農家だったり、それぞれの『知』をインデックスとしてまとめているのが図書館。

せんだいメディアテークや武蔵野プレイスは『活動の拠点』となっている。そういう場ができることで活動がどんどん広がっていく。東日本大震災が起きたとき、せんだいメディアテークがあれほどに機能できたのは、活動の拠点として10年間の積み重ねがあったから。今も地域はますます良くなっている。図書館というのは、地域自治の拠点になり得る。

そこまで目指すのはかなり大変。職員にとっても本を扱うだけではなくるので。もちろん、本は大事だが、『本』だけではなくるので、「その覚悟はありますか？」ということを知りたい。

瀧澤館長：

本だけではない、と、本当に思っている。

森田委員：

それであれば、どこまでやるのかということ議論していけばよい。

例えば、武蔵野プレイスでは地下2階に青少年の居場所を作った。青少年たちがそこに自由にいていい、と。それでもちゃんと書架にも行っている。ある程度宿題もやって、全部やった挙句、「ちょっと読んでみるか」と、なっている。

そういうようなことを積み重ねてきて、人口14万人の市で200万人が利用している。そうしたいのであれば、そういうことをすべき、ということ。

瀧澤館長：

最初に申し上げたとおり、これからの松本市の図書館のミッション・ビジョンを話し合っていて、それに付随していくサービス・施設の話にいていただけるといいと思っているが、その辺の流れが分かりにくい「案」の示し方だったと思う。まずは市民に対してどういう図書館にすればよいかを考えたい。

森委員：

図書館だけで考えない方がいいと思う。あちこちの事例には「ここと組んで図書館の機能を拡張した」というよりも機能融合したというようなものもあるが、松本市は図書館とどこが組んだら市民が幸せになるかという話をしたらどうか。

この場所に建っている松本市中央図書館という場と、分館を含めたシステムとしての中央図書館の両方を考えなければならないので、図書館機能全体の話をしながら場としての展開も考えたい。そのために、それぞれ「どことどういう風に組んだら、市民に対してこんなアプローチがで

きる」というような話がしたい。

伊東委員長：

議論の方向性が見えてきたように思う。それと同時に、この資料にまとめられた課題も最終的な問題としては当然ある。そのなかでどういう部分を委員会として押していくかというのも、さっき言った「裏付けのある提言をしていく」ということになる。

2～3回目くらいは、こういう枝葉を意識してやっていこうという気はしている。

そこで、事務局に4回目の「ゾーニング」はこの図書館の物理的なものなのか、サービスの区分という意味なのかをお聞きしたい。

瀧澤館長：

分館ではできないであろうゾーニングを基幹図書館でどのようにしていくか、ということ。ここは単独館だが、複合的な建物でやっているところもあるので、そういうところのメリットについてもご意見を伺いたい。

森委員：

塩尻市の「えんぱーく」は子育て支援センターとかなり密接だが、最初からそこの複合施設にする話だったのか。

伊東委員長：

図書館も子育て支援センターも老朽化に伴う移転改築が必要な時期だったので、それをプラスに考えるには何をしたらいいかということだった。

森委員：

最近出された白馬村の図書館複合施設基本構想は、子育て支援ルームや小学校の放課後児童クラブが建て替えの時期を迎えているので、一緒に整備しようというところからきている。松本市はどうなのか。それがわかれば話しやすいと思う。

瀧澤館長：

基本的に単独施設でいくというのが現在の大方の考え方ではあるが、図書館のあるべき姿として複合施設のメリットを活かすという提言をいただくことはできる。

伊東委員長：

この委員会としては大方の考え方にすり合わせる必要はなく、図書館がどうありたいのか、そのためにはどうすればいいのかを考えていけばいいと思う。例えば、アンケートでも多く出されていた駐車場のこと。現状で50台の駐車スペースのところに新しい人を呼びたいというなら、駐車場をどうするのか、ということ議論していけばいい。

塩尻は複合施設ありきだったが、私の論法では、図書館が手をつなぐ相手は複合施設の中になければいけないということはなく、1人目は子育て支援センターだったが、2人目3人目は、遠くの農協さんでもいい。地域の枠のなかであればいいので、大事なのは「手をつなぐ気があるか」ということ。必要なのは、単独施設か複合施設かという議論ではなく、図書館のあり方として「何をやる気があるか」ということ。その議論をどう進めていくのかご意見をいただきたい。

森田委員：

2回目は、話し合いたいトピックをみんなで出し合うというのはどうか。

伊東委員長：

私たちのワークショップということですか？

森田委員：

全員。私たちは言いたい放題なので、ここにいる全員で。

伊東委員：

職員も含むということですか？

森田委員：

そう。やりたいことを出していかないと、今、何に困っているのか、それをどうするのかが見えて来ない。

たとえば、「資料の提供第一」と言ってもニーズを把握していなければ提供できない。どうやってニーズを把握しているのか等々、話し合うべきトピックを決めていくということをやってみたい。

森委員：

先ほどの「知は現場にある」ということを掘り下げたい。それはどういうことなんだと。そこに図書館のサービスを落とし込むと、どういうことをすればいいのか、と。

森田委員：

図書館と現場を行ったり来たりするのが一番いい。知って、現場で感じて、また知る。行ったりきたりするということ。

森委員：

それはニーズの把握の仕方のひとつ？

森田委員：

そう。僕は「御用聞き」といってスタッフがあちこちに行っている。例えば美術館に「どうい本を入れるといいか」と相談に行き、それが入ったら次はブックリストを渡すと美術館のお客さんに「図書館にあるので、これを読んだらいいですね」と、美術館の学芸員が「処方箋」を出してくれる。図書館と美術館を往来する『知』は向こうにある。

そんな風に図書館の役割を変えていかなければいけない。

また、「図書館は公平に」というが、不公平なサービスをする方が実はいい。図書館で本を借りられる人というのは、社会のなかでは相当デキる人。一方で図書館に来ることさえできなかったり、本を探せなかったりする困難を抱えた人もいる。そういう人にどうやってサービスをするかを考えなければならない。デキる人に対するサービスよりも手厚くなるから不公平ということにはなる。「助けなければならない人に、より手厚いサービスをするのが公共のミッションです」というくらいに、今までの常識を疑って「じゃ、どういう風にする？」ということをやっていかないと、今までどおりのものができるだけになる。

せんだいメディアテークを作るとき、当時の生涯学習課長が「この施設は役所の仕事をなくすために作るんですよ」と言った。市民は問い合わせや相談のために市役所に来るが、自分で検索した情報を取捨選択する力がつけば、市役所は助けを必要とする人や未来に向かっての仕事をより多くすることができるからということだった。その課長さんは市長になって東日本大震災を乗り越えた。

僕はそういう、おかしな図書館を含んだ施設をやってきた。だから、この資料をみても僕のかなかではできないのではないかと感じている。

吉成委員：

図書館のミッションから入らないと何も導き出せないというのはそのとおり。それを主に議論するべきだと思う。森田さんが言ったとおり、知は現場との往復のなかでしか輝かないし、響かない。それは非常に具体的なもの。例えば、畑は図書館にないが、どうすれば図書館と結ぶことができる？というような具体的な話をしていかないと、その魅力は作り出せないという気が自分でもしている。

最終的には「全館対応」みたいな話や「今あるものをベースにやりなさい」という話になるかも知れないが、図書館のミッションやビジョンが変われば、変えられるものはある。職員の意識も自分が納得していれば変えることはできる。

僕はこの5年間、メディアコスモスに絞ってやっていたので、市内の他の6館とはもの凄い差ができた。そういう差ができるのは始めから覚悟していたので、時間差はあっても、段々、他の館も変わっていくと信じてやるしかないと思っている。それでも変えられることはいろいろある。取り入れてもらえるかどうかかわからないが、そういうことを考えていくことにも意味はあると思う。

基幹図書館と分館の両睨みでやっていくしかないのではないかな。

伊東委員長：

職員のワークショップは、こういう形で出して終わっているのか。

森委員：

アンケート調査よりも前にやったと聞いているが・・・

伊東委員長：

いろいろな目標や問題意識が出ているので、意識の共有という点ではいいが、これを並べておくだけでは、この先、何も始まらないので、「このなかでどれをやる」という具体化の共有、絞り込みの作業をする意味はあると思う。

このワークショップは職員だけでやっているのだから、「畑へ行けよ」と言う人は出てこない。それを言うのは委員会の役目。職員には、このなかのどれかを実現するとか、スキルアップをどうやっていくのか考える作業をしてもらうことは必要だと思う。

吉成委員：

メディアコスモスをオープンするときに、全部やり直さなければならなかったのだから、これを貼り出して、「これは絶対にやりたい」というのを全職員で1人3つまで“いいねマーク”を付けてもらった。マークが集まったものに対して「具体化するにはどうする？」と議論が始まった。今、私たちの看板になっている『子ども司書』はそこから生まれたもの。

この委員会ですらそういう作業を試みるのもいいと思う。

伊東委員長：

それはいい。

吉成委員：

それに対しては我々もいろいろな意見を言えるのではないかな。

伊東委員長：

やはり職員がその気にならないと変えられないので。それはいいかも知れない。

森委員：

「なぜ？」というところを大事にしたい。今日、今後の予定を出していただいているが、「なぜ、これをしたのか」「これをするとどうなるのか」というのが大事だと思っている。

職員から出てきた意見にも、なぜそうしたいかというのは我々が一緒に考えられるところだと思う。

伊東委員長：

このワークショップの後、「ダイナミックに考えろ」というのが加わっているので、職員もダイナミックに考えてはどうか。「ダイナミックに考えれば、これ、やり方はいくらでもあるね」という目線が変わっていくと思う。それは大事なこと。

今回は職員全員に参加してほしいとは言わないが、何か作業的なことはできないか。そうすることで職員の意識が見えるかもしれないし、何よりも職員同士が問題意識を共有することが大事だと思う。

森田委員：

今、いろいろな分野で危機的な状況だと叫ばれている。そのなかでどう生きていくか、生き抜いていくのかを考える場所が必要になっている。それは博物館ではないし、公民館は居場所としてはいいが、行政が関わることには難しい場所だろう。そういう意味では図書館しかないということ意識してキチッと考えなければいけない。

吉成委員：

先ほどの知性の話はサバイバルのためでもあるということ？

森田委員：

そう。

吉成委員：

メディアコスモスのシビックライブラリにも3.11のものを入れてあるが、わざとそうしている。そこから始めないと・・・と、いう時代ではないのか。

森田委員：

生きるためのことは全市民に対すること。「本が好きな人だけ集まれ」ということではない。今、多動な子供がいるので、「静かにしなさい」と強制することができない。図書館には静かにしなければいけないスペースはあるにしても、基本は自由でなければ全員は呼べない。そこから変えなければいけない。

森委員：

やはり目的が大事。図書館がどこまで腹をくくって「やります」と言えるかということだと思う。全市民をサービス対象にしますと言っても、現実問題、全市民に建物に入ってもらうのは物理的に不可能。デジタルシフトされていれば来館しなくても、図書館機能にアクセスできるといった手段を用意するなど。「なんのために」というのは、全市民がサバイバルしていくための知恵のインデックスを求めてもらえる図書館にするにはどうするかということ。

森田委員：

図書館は新しい関係性を作る場になる。新しい関係性を作ろうとすると学びが絶対に必要になる、その時に本はすごく大事。

森委員：

松本と言えば公民館活動、市民活動が盛んで伝統的に民度が高いまちということもある。そういうことも踏まえながら「図書館はココをやっていけばいいと思っていたけど、実はそうだったんだね」という意識改革が必要かも知れない。でも、それは図書館だけがやればいいという話ではないので・・・。

吉成委員：

先ほど話したとおり「学都松本として目指すまちの姿」に書かれていることは、とても格調高いと思う。言い換えたら今の時代のテーマはこれ。図書館の枠に囚われずに言ってしまえばいい。すごくいいと思います。

伊東委員長：

今、図書館は2つの流れに分かれようとしているという話がある。2つあるならどちらに行けばいいのかわかっているのに、普通にやっていたのでは、その向かうべき方向に自分たちは行けるのだろうかという不安からみんな抜け出せない。だから機会があれば「自分壊しが必要だ」という話をしている。

私たちはせっかくこの機会を与えられたので、あと5回のなかで松本市の図書館に火を起こす力が出てくれれば良いなと思っている。

具体的な話、せっかく職員の意見が出ているのだから、先ほどのメディアコスモスの話のように“いいねマーク”を付けるのもいいだろうし、やり方はお任せします。それをもって何か作ろうということではないが、やることだけで既に意味があることだと思う。それを元に私たちが何か議論できるかも知れない。

そちらはそれとして、私たちの議論をどうするかという話をこれからしたい。

伊東委員長：

やり方は、この形式でいくか、ワークショップ的にいくか等々、考え方をまず出していただきたい。

森田委員：

よくあるのは島状にしたテーブルの周りに立って、思いつくキーワードを書いて出し合い、何が大事なキーワードを議論する手法。

伊東委員長

職員に出してもらってもいいが、ここに出て来るのが大変なら、ワークショップで出されているものを絞り込んでおいてもらってもいい。ここにいる方々にはその場で出してもらってもいいと思う。

森田委員：

私は都城市図書館のときに、スタッフのみんなに「図書館の大事なもの」を挙げてもらったことがある。本当にいろいろなことが挙がってくる。静粛性・静寂性みたいなことも挙がってくるし、いろんなことがあるけど、「あなたにとって大事なもの」というと、当然、資料っていう人もいるし、命っていう人も健康っていう人もいた。

瀧澤館長：

今あるものに囚われず、可能性、何ができるかということを出してほしい。

森田委員：

今あるもののなかに大事なものもあると思うので、それを挙げてくる人もいいが、今やっていないことで、とても大事なことがあるのではないかとということが挙がってくれば凄くいい。

吉成委員：

やはり現実があるので、自分の職制のなかだけで考えてしまう人も多いだろう。それを外すために「図書館の大事なものは？」「あなたが館長だったら」というくらいの質問がいいと思う。

瀧澤館長：

「あなたが館長だったら」は、自分事として考えてくれそうで、すごくいいと思う。

森委員：

「それはダメ」とは言われない安心感がある。「館長OKならいいよね」というような。

伊東委員長：

事務局に次回の通知までにやり方を考えていただくこととし、次回以降の会議日程を決めておきたい。

(5) その他

【会議日程の協議結果】

第2回 9月24日(木)、第3回10月26日(月)、第4回11月26日(木)、
第5回12月21日(月)、第6回 1月25日(月)

会議開始時間を、13時30分からとする。

出席者の来館が困難な事由が生じた場合、ZOOMによるテレビ会議を実施

菊地委員：

事務局に質問。この委員会は誰の要請で設置されているのか。

第1回の議論を経ても、私には委員会設置の目的、議論の内容、到達点、委員会以後の展開が明確に掴めていないため、改めてお聞きしたい。

瀧澤館長：

大規模改修の時期がきていることを踏まえ、より良い図書館なるよう機能アップを図るにあたって中央図書館のあり方を検討するよう指示があったのが始まり。

さまざまな知見をお持ちの識者に実質的な論議をしていただけるよう、委員会設置の関連予算を計上することになった。現市長になってから予算査定が行われたが、その際に、大規模改修に囚われず、より良いものを作るための議論をしていただける委員を人選するよう指示があった。

菊地委員：

図書館概要のP 7に令和2年度の重点施策として中央図書館の大規模改修が一番目に入っているが、この委員会では大規模改修ありきではなく、松本市の図書館をどうするのかという議論をするということによいか。

瀧澤館長：

はい。

森委員：

委員の委嘱状には「検討を終了するまで」とあるが、委員会の成果物が求められているのか。我々は喋りっぱなしで、事務局が6回までのものをまとめて報告するというイメージでよいのか。

瀧澤館長：

後者です。

伊東委員長：

先ほどの館長から話しがあった、松本市図書館のサービス計画に本委員会の議論が反映されていくのではないか。

菊地委員：

やっていくなかで見えてくるとは思う。今の自分には何のために集まって、どこに向かって話をすればいいのかというのが見えていない気がする。

伊東委員長：

それは大事なところ。

森田委員：

これまでやってきたことを変えるというのはもの凄いパワーがいる。我々、呼ばれて集まった委員の立場ではできないこと。来年度の当初予算を要求していくにあたって、何かしないと、もの凄いパワーがかかることを職員だけでできるのか心配。

菊地委員：

臥雲市長が中心市街地だけでなく、市役所、旧開智学校、中央図書館、松本城を結ぶ松本城北のエリアを重要政策拠点と捉えておられるので、私はこの委員会は、松本城北エリアにある中央図書館の建て替えをどうするのかという議論の場だと思っていた。委員会に臨むそもそもの発想が違ったのかも知れない。

伊東委員：

建て替えも委員会の大きなテーマということでいいと思う。

森委員：

まさに菊地委員が言われたようなところを知りたかった。

伊東委員長：

建て替えも論ずるとは言っても、我々が用地選定をするわけではなく、市役所の庁舎や新博物館と同じレベルで図書館の建て替えをどうしたらいいのか、ということも話していけばいいと思

う。今は議論の着地点が見えていない段階だが、ここから進めていくということがいい。

吉成委員：

岐阜にも岐阜城があって、歴史文化のまちとしてどう再生させるかということ、3年目の新市長がやっている。メディアコスモスは第2段階として、市長から「シビック（市民）プライド」という言葉を使って、シビックプライドと文化のまちを合わせていくという使命を与えられている。まちのなかでの図書館の立地・位置づけというのは大きいと思う。

伊東委員長：

図書館というところは、全国的に総合計画には食い込めないでいる。この委員会の設置が市長指示によるものかどうかは分からないが、図書館をなにかしら総合計画にねじ込んでいくには良いタイミングだと思う。

森田委員：

厚木市でやっていることだが、市庁舎と図書館、科学館、消防本部、国県の関係機関を一体整備している。それに私が携わっているので、そういう話もここでの議論に出した方がいいかな。

菊地委員：

セントラルパーク構想に位置づくというイメージがあれば、市が提唱する「もっと歩こう」というようなコンセプトに乗っていきける。そうなれば、図書館単独の駐車場を用意する必要はなくなるというように、考えなくていくことが増える分、まちのなかでの図書館の機能の話に進んでいきけると思う。そういう体系的な話をしたい。

先ほどから駐車場の話題が出ている。アンケートでも駐車場の台数が少ないという声が多いということだが、そもそも車で来るべき図書館を目指すべきなのかという議論を私はしたい。

確かに本は重いので車に乗りたいし、図書館直結の駐車場は台数が多い方がいいという話になるかもしれない。そうすると、このまちの場合、大型駐車場がまちの中心部まで車が入る導線を誘導するという形になる。それが城下町松本にとっていいことなのかという目線で検討する必要があるが、それをこの委員会に持ち込んでよいものか考えている。

しかし、松本の図書館の話をするのであれば、今のような視線も必要なのではないかとも思っている。

伊東委員長：

終了時間になるので、今日の議論は終わりとする。限られた期間のなかでやらなければならないので、なにかあれば遠慮なく私の方へ。ただ集まるのではなく、いろいろなことを共有しながら進めていきたい。

以後、事務局から委員会の公開について、議事録への委員氏名の表記について委員の意向を確認。委員会審議は非公開とし、議事録を公開する。議事録中の発言には委員名を付することとした。

以上